

IV章 外国語活動の取り組み

「コミュニケーション能力の素地を養う」という目標を達成するために、平成23年度より外国語活動における「思考力」の育成に取り組み始めた。

本年度は、これまでの「思考力」研究の成果を踏まえつつ^{*1}、新たに学年間の系統性を重視することで、より一層コミュニケーション能力の素地を養うことができると考え、実践を積み重ねている。

本章では、その取り組みについて述べていく。

1 「思考力」育成に向けて

本節では、本年度、小学校外国語活動における「思考力」育成のために、学年間の系統性を重視した研究を進めるに至った経緯を述べる。

(1) コミュニケーション能力の素地

平成23年度に、現行の学習指導要領が全面実施となり、第5、6学年において年間35時間の外国語活動が必修化された。ただ、平成21年度から先行実施が認められており、多くの学校では本年度で5年目を迎えたこととなる。

外国語活動の主なねらいは、下記の通りである。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。
(文部科学省、『小学校学習指導要領』, 107頁)

では、外国語活動で育成すべき「コミュニケーション能力の素地」は、中学校外国語科でどのように生かされるのか。外国語活動を通して子どもにつけたい力を明確にするために、中学校外国語科と比較してみることにする。

中学校学習指導要領において、外国語科の目標は次のように設定されている。

外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
(文部科学省、『中学校学習指導要領』, 105頁)

このことから、中学校では、「実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力の基礎を養うこと」を主なねらいとしていることが分かる。

この小学校外国語活動と中学校外国語科の違いについて、直山木綿子氏（文部科学省）は、著書の中で次のように述べている。

*1 本校では平成12年度から文部科学省の研究開発指定を受け、小・中の9年間を見通して、コミュニケーション能力を育成する実践を積み重ねてきた。平成18年度から、低・中学年においても外国語活動の時間を特設して取り組んでいる。

中学校の外国語は、外国語の技能を身につけることを第一のねらいにしている一方で、小学校外国語活動はそれを第一のねらいとしておらず、2年間の外国語活動を経験することで、外国語の技能を身につける素地を養うということである。

(直山木綿子著、『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』, 東京書籍, 2013年, 15頁)

このことを踏まえ、外国語活動では、目標として掲げられている三つの柱、①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める、②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う、③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ、を統合的に体験することで、外国語の技能を身につける素地を養うことが求められている。

コミュニケーション能力の素地に関する三つの柱の具体について、直山氏は同書の中で次のように述べている。

- ・日本語や日本の文化を含む、様々な言語や文化に対する興味関心の高まり、言葉の豊かさや面白さへの気付き
- ・不慣れな外国語をあえて用いることで、母語のときにはしなかったような工夫、例えば相手の顔の表情や、身振り手振りを見て、自身もっている外国語の知識を総動員して相手を理解しようとする。また、自分の思いを伝えるために、母語のときにはしなかったような工夫をして、相手に何とか伝えようとする、コミュニケーションの積極性
- ・活動で用いている外国語の語彙や表現を聞いたり言ったりすることを通しての外国語への慣れ親しみ

(上掲書, 14頁)

このように、外国語活動において育成を目指す「多少分からない語彙や表現があっても相手の様子から推測したり、知っている言葉を基にして何とか聞こうとしたりする」「正確な英語ではないにしても、何とか英語で伝えようとする」といった「話すこと」「聞くこと」の素地は、中学校外国語科において大いに発揮されるのである。

(2) 「思考力」育成への手だて

本校では、平成12年度から文部科学省の研究開発指定を受け、小・中の9年間を見通して、コミュニケーション能力の素地を育成する実践を積み重ねてきた。また平成21年度からは、低・中学年においても外国語活動の時間を特設して取り組んでいる。そして平成22年度より、コミュニケーション能力の素地を養う際に必要となる「思考力」の育成に取り組んできた。

次に示した直山氏の著書から、コミュニケーション能力の素地を養うことと、「思考力」を育成することの関連についてうかがうことができる。

外国語を使ってコミュニケーションを図る外国語活動では、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手が伝えようとしていることを理解したりすることが、母語のときほど簡単にはできない。そこに言葉の壁ができるからである。だからこそ、試行錯誤しながらその壁を乗り越えて、互いに意思疎通ができたときの達成感や一体感は大きくなると思われる。この感動を味わった児童は、「言葉で通じ合うこと＝心が通じ合うこと」とであると気付くだろう。

(直山木綿子監修、『「外国語活動の授業づくり」学級担任から学ぶ基本の指導技術』, 文溪堂, 2012年, 91頁)

外国語を使ってコミュニケーションを図る際には、言語や文化の違いからコミュニケーション停止状況が生じる可能性がある。このようなコミュニケーション停止状況を乗り越え、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手が伝えようとしていることを理解したりする際に「思考力」が発揮されるのである。つまり、「思考力」を育成することにより、コミュニケーション能力の素地を養うことができると考えた。

そこで、平成22年度は、積極的にコミュニケーションを図るための「思考力」育成に向けて、平成23年度は、日本と外国との言語や文化の違いを理解するための「思考力」の育成に向けて実践を積み重ねてきた。下に平成22、23年度に育成を目指した「思考力」を示す。

平成23年度に育成を目指した「思考力」

平成22年度に育成を目指した「思考力」

非言語的な要素を用いたり、文脈から意味を推測したりしながら、コミュニケーションを図る力

文化の違いや言語の特徴から生じるコミュニケーション停止状況において、その要因に気づき、異文化に順応したり自文化と使い分けたりしながらコミュニケーションを図る力

そして平成24年度は、より外国語活動の授業の質を高めるために、特別支援教育の考えを参考にし、「学習問題設定の場」「『気づき』の場」「アクティビティの場」それぞれに適切な支援を行うことで「思考力」の育成を目指したのである。その結果、次のような外国語活動における「思考力」育成のための支援を見いだすことができた。

① 「学習問題設定の場」における支援

- コミュニケーション停止状況の示し方を複数化する。複数化する際には、視覚・聴覚の複合、さまざまな視点の転換、認知特性に応じた選択等の工夫をする。

学習問題設定の場では、デモンストレーション等によって、コミュニケーション停止状況を分かりやすく提示し、どの子にもしっかりと問いをもたせることを目指した。実践では、特別支援教育の考えを参考に、「視聴覚的方法で指導する」「ゆっくりと、かつ繰り返しを多くして指導する」「特性に応じて指導する」等、教材を複数の方法で提示することにより、明確な問いをもち、コミュニケーションを成立させようと目的意識をもって活動に取り組む態度を育てることができた。

② 「『気づき』の場」における支援

- よけいな情報や操作を取り除いたり、気付かせたい事柄を強調したりして「気づき」が生まれやすくなる環境を整える。

「気づき」の場では、子どもたちが「気づき」に至りやすくなるような支援を行うことを目指した。実践では、「視聴覚教材を有効に活用する」「キュー（手がかり）を拡大し、理解

を促進する」「使用する教材を『簡素化』『ビジュアル化』する」等といった特別支援教育の考えを参考に、子どもたちが何に目を付ければよいか分かるような環境を整えた。教師の行動の何に注目するか、模倣する対象のどこに注目すればよいのか、提示する資料を適切に強調しておくことで、言語や文化の違いに気付くことができた。

③ 「アクティビティの場」における支援

- アクティビティで必要となる表現を、スモールステップで身に付けさせる。その際、課題意識をもたせるような変化のあるステップを組み込む。
- アクティビティの最中に個々が手がかりにできるような、視覚化・構造化された教材を準備する。

アクティビティの場では、一人で活動する際にも、どの子どもも自信をもってコミュニケーションを図れるようにすることを目指した。そのためには、アクティビティに至る前の練習段階を充実させること、そして、アクティビティ中につまずきを見せる子どもへの支援を工夫することが必要となる。実践では、「モデルを提示し、リハーサルをして学習させる」「コミュニケーション支援ボードを活用する」等といった特別支援教育の考えを参考に活動を組織することで、何とかして相手を理解しようとしたり、相手に伝えようとしたりするコミュニケーションの積極性を育てることができた。

(3) 「思考力」育成の課題

全学級が授業実践に取り組む中で、上記のような「思考力」育成のための支援の在り方を見だし、昨年度の研究発表会では、その成果を参会の先生方に示すことができた。

参会の先生方からは、下記のようなご意見をいただくことができた。

- ・「どうにかして伝えたい」という意欲が感じられ、子どもたちが工夫して演じようとする姿が見られました。
- ・伝わらないことばがあるとき、ALTとのやり取りの中で出てきたことばをうまく使ったことで、より深く記憶することができたと思います。
- ・スモールステップで学習を進めることができおり、「思考力」が高まっていく様子が見られました。

(第96回教育研究発表会参会者アンケートより一部抜粋)

このように、1単位時間の中で、「学習問題設定の場」「『気付き』の場」「アクティビティの場」それぞれに特別支援教育の考えを生かした適切な支援を行うことは、すべての子どもの「思考力」の育成に一定の成果があったと言える。

しかし一方で、次のようなご意見もいただいた。

- ・「どのように伝えるか」という本時のねらいは、中学校外国語科の「表現力」に当たります。小学校でどこまでねらうのか整理する必要があると思います。
- ・5、6年生で行った外国語活動を振り返りながら学習問題を設定する方法もあったように思います。「ジェスチャーを使う」「別のことばを当てはめる」といった方法が、前時までにはほとんど意識されていなかったように感じました。

中学校学習指導要領解説外国語編では、外国語活動と中学校外国語科との違いについて次のように示されている。

今回の改訂では小学校に外国語活動が導入され、特に音声面を中心として外国語を用いたコミュニケーション能力の素地が育成されることになったことを踏まえ、中学校段階では、「聞くこと」、「話すこと」に加え、「読むこと」、「書くこと」を明示することで、小学校における外国語活動ではぐくまれた素地の上に、これらの四つの技能を総合的に育成することとしている。

同じ趣旨から、英語の目標において、「聞くこと」、「話すこと」の領域にかかわる記述に盛り込まれていた「慣れ親しみ」という文言を削除している。

(文部科学省、『中学校学習指導要領解説外国語編』、3－4頁)

前に述べたように、外国語活動と中学校外国語科の共通点は、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指している点である。しかし相違点として、外国語活動は語彙や表現への「慣れ親しみ」であるのに対して、中学校外国語科では、それらの定着を第一のねらいとしていることが挙げられる。また、外国語活動では、「聞くこと」や「話すこと」の正確さまでは求めていないのに対して、中学校外国語科では、基本的な語彙や表現に正確さと適切さが求められることも挙げられる。

このことから、外国語活動においてコミュニケーションを図る際には、「ジェスチャーを使う」「知っている近いことばを当てはめてみる」「絵カード等を指し示す」等といった非言語的な要素を用いたり、文脈から意味を推測したりすることを重視した活動を行うことが大切であると考えられる。また、「どうすれば伝わるのか」と知っている語彙や表現、非言語的な要素を用いてコミュニケーション停止状況を打破しようと思える子どもを育てることも大切である。小学校段階でこのような活動を積み重ねた子どもは、きっと「もっといろいろな言葉や表現を知りたい」「いろいろな国の人と話してみたい」といった意欲に高まりが見られるはずである。この意欲の高まりが、中学校外国語科において「コミュニケーション能力の基礎を養う」ことにつながるのではないだろうか。

では、小学校外国語活動において「コミュニケーション能力の素地を養う」ためには必要なことは何か。昨年度、校内の授業討議においても、「中学年の実践が高学年の実践にうまくつながっていないのでは」といった意見が出された。その原因の一つとして、年間計画は作成しているものの、本校が目指す「コミュニケーションを図る力」を育成するために必要な、「ジェスチャーを使う」「知っている近いことばを当てはめてみる」「絵カード等を指し示す」等といった方法については、学年間の系統性が明らかになっていないことが挙げられる。

高学年においては、昨年度から、「Hi, friends!」を使用して実践を行っている。この「Hi, friends!」は、おおむね次のような単元構成になっている。第1時は「新しい語彙や表現に出会う」、また第1時から第3時にかけて、「語彙や表現に慣れ親しむ」、そして第3、4時では、「コミュニケーション活動を行う」というように、単元の学習を通してコミュニケーション能力の素地を養うことができるように構成されている。つまり、「Hi, friends!」の単元構成に沿って系統的に、かつ繰り返し学習を進めれば、高学年においてコミュニケーション能力の素地を養うことができるはずである。

そこで本年度私たちは、このような課題を受け、3年間の研究の成果を生かしつつ学年間の系統性を重視することにより、すべての子どもの「思考力」育成を目指して研究を深めていきたいと考えた。

2 本年度の取り組み

(1) 本年度研究の重点

上記の課題を受けて、低・中・高学年それぞれに応じた外国語活動を行う際の重点を設定するとともに、「Hi, friends!」を基に新たな各学年の年間指導計画（右図及び94頁以降を参照）を作成し、学年間の系統性を重視した取り組みを進めることとした。高学年における外国語活動の時間は、2年間を通して70時間と限られている。その限られた時間の中で、より効果的に新しい語彙や表現に出合わせ、コミュニケーション活動を行うことができれば、より一層「思考力」の育成を図ることができると考えたのである。

まず以下に、本校が設定した、低・中・高学年の重点を述べる。

① 低学年において、「思考力」育成を図るために

低学年の重点

- 子どもたちが興味・関心をもちそうな題材を選び、場面を設定し、無理なく自然に新しい語彙や表現に出合わせる。新しく出合った語彙や表現を使ってコミュニケーションを図る力を育成する。

低学年では、中・高学年における外国語活動とのつながりを重視した指導を行う。先に述べたように外国語を用いてコミュニケーションを行うことは、日本語に比べて難しい。そのため、特別支援教育の考えを生かすとともに、少しでも多くの時間をかけて外国語に「慣れ親しむ」ことが大切であると考えた。

そこで、具体的には、高学年で用いる「Hi, friends!」の前半部分を指導することにした。「Hi, friends!」の前半部分では、主に「新しい語彙や表現に出合う」「語彙や表現に慣れ親しむ」ことをねらいとした活動が設定されている。この内、低学年では、「新しい語彙や表現に出合う」ことに重点を置く。その際、低学年という発達段階を考慮し、子どもたちが興味や関心をもちそうな題材を選び、場面を設定し、無理なく自然に新しいことばと出合わせるようにする。「言いたい」「知りたい」とことばを欲する気持ちを引き出した上で外国語を聞かせ、そのことばの意味を類推して考えることができるようにするのである。

そしてその後、新しく出合った語彙や表現を使って簡単なコミュニケーション活動を行う。その際、語彙や表現をうまく使えない場合はジェスチャー等の非言語的な要素を用いることが効果的であることに気付かせるようにする。このように、低学年の段階でできるだけ多くの語彙や表現に出合わせておくことで、楽しみながらコミュニケーションを図る力（平成22年度に育成を目指した「思考力」を参照）の育成を目指した。

学年・学期	外国語活動	年間指導計画	学習内容・指導内容		活動内容
			指導	学習	
低学年1学期	英語	挨拶の仕方、自己紹介の仕方、物の名前を言う、物の色や形状を説明する、物の位置を説明する。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。
低学年2学期	英語	物の名前を言う、物の色や形状を説明する、物の位置を説明する。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。
低学年3学期	英語	物の名前を言う、物の色や形状を説明する、物の位置を説明する。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。
低学年4学期	英語	物の名前を言う、物の色や形状を説明する、物の位置を説明する。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。
低学年5学期	英語	物の名前を言う、物の色や形状を説明する、物の位置を説明する。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。
低学年6学期	英語	物の名前を言う、物の色や形状を説明する、物の位置を説明する。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。	挨拶、自己紹介、物の名前、物の色や形状、物の位置。

【新しく作成した年間指導計画（一部抜粋）】

② 中学年において、「思考力」育成を図るために

中学年の重点

- 語彙や表現を繰り返し聞いたり言ったりして慣れ親しんだ後、簡単なコミュニケーション活動を行うことでコミュニケーションを図る力を育成する。

次に中学年では、「語彙や表現に慣れ親しみ、簡単なコミュニケーション活動を行う」ことに重点を置く。「Hi, friends!」では、【Let's Listen】【Let's Play】【Let's Chant】【Let's Sing】が相当する。

慣れ親しむことは、言いかえると単元末のコミュニケーション活動に向けた練習である。コミュニケーションを図るためには、自分の思いや考えを適切に相手に伝えるために使う材料（＝語彙や表現）に十分慣れ親しんでおくことが必要である。しかし、絵カードを見ながら指導者が言う語彙や表現を機械的に繰り返すだけでは、子どもたちはすぐに飽きてしまう。そこで、子どもたちが楽しく繰り返し練習できるように、特別支援教育の考えを取り入れながら、その語彙や表現を思わず「聞きたくなる」「言いたくなる」ような工夫をする必要があると考えた。

このようにして外国語に十分慣れ親しんだ後、簡単なコミュニケーション活動を行う。お互いのやり取りの中に、自己決定や自己選択の要素を入れるとともに、「友達のことを知りたい」「自分のことを伝えたい」と思える必然性のある場面を設定することで、コミュニケーションを図る力（平成22年度に育成を目指した「思考力」を参照）の育成を目指した。

③ 高学年において、「思考力」育成を図るために

高学年の重点

- 外国語活動の質を高めるために、特別支援教育の考えを参考にして、「学習問題設定の場」「『気付き』の場」「アクティビティの場」それぞれに適切な支援を行うことでコミュニケーションを図る力を育成する。

外国語活動が必修化されている高学年においては、昨年度と同様、特別支援教育の考えを参考に平成22、23年度に設定した「思考力」の育成を目指した。活動は、「Hi, friends!」を中心に行うが、前半部分の「新しい語彙や表現に出会う」「語彙や表現に慣れ親しむ」活動を簡素化し、「コミュニケーション活動を行う」ことに重点を置いてコミュニケーションを図る力の育成を目指した。低・中学年で、語彙や表現に慣れ親しませておくとともに、非言語的な要素が有効であることを捉えさせておくことにより、積極的にコミュニケーションを図ることに絞って活動を行うことができると考えたのである。また、「学習問題設定の場」「『気付き』の場」「アクティビティの場」において有効な支援を考える際は、昨年度見いだした四つの支援の在り方（本章89、90頁参照）を参考にすることにした。

思考を通して乗り越える問題を明確にもち、言語や文化の違いに気付き、そしてコミュニケーション活動を行う過程でこそ「思考力」は育つ。特別支援教育の考えを参考にすることで、そのような学習の機会を奪うことのないように留意しつつ、特別支援教育の外国語活動研究と連携しながら実践に取り組んでいった。

次項では、その実践事例を紹介する。

(2) 学年間の系統性を重視し、「思考力」育成を目指した活動及び支援の実践

① 新しい語彙や表現に出合わせるために — 低学年の実践から —

「Hi, friends!」の各単元の導入では、コミュニケーション活動を行う際に必要な語彙や表現に慣れ親しませる場が設定されている。低学年では、これらの新しい語彙や表現に出合わせる活動を手厚くすることで、積極的にコミュニケーション活動に取り組むことができるようにしたいと考えた。その際は、子どもたちが興味・関心をもちそうな題材を選び場面を設定することで、無理なく自然に新しい語彙や表現に出合わせることに留意した。

ア 第1学年「いくつもっているのかな?」(「Hi, friends! 1」Lesson 3) 実践より

本実践では、数を表すことば(“one”, “two”等)、数を尋ねる表現(“How many?”)に慣れ親しませる活動を行った。

「言いたい」「知りたい」と新しい言語や表現を欲する気持ちをもってコミュニケーションを図ることができるように、まず、数個のブロックを袋に入れ、入っている数が分からない状況を設定した。また板書上には、1から10までの数字を書いたカードを順に並べていった(自然に新しい語彙や表現に出合わせる場の設定)。そうすることで、「数の言い方を知りたい」という思いが膨らみ、自然と“one, two, three, …”次は、“four, five, …”と友達どうして教え合ったり、教師に尋ねたりしながら英語で数を言い始めた。そして、英語で数を尋ねる表現を教えることで、無理なく新しい表現を学ぶことができたのである。

その後、教師と袋の中にいくつブロックが入っているのか英語やジェスチャーを用いて尋ね合い、同じ数になった時の喜びを味わわせるようにした。そして、この喜びを「友達とも味わいたい」という思いにつなげるために「同じ数のブロックを持った友達を5人見つけよう」というゴールと目的を明確にしたアクティビティを設定したのである。そうすることで、自然に英語を用いたコミュニケーションを図ることができた。またその際、数を表す英語がうまくことばが出ない場合は、数を指で表したり、空に書いたりする等の表現の工夫をしている子どもを見つけ称賛することで、ジェスチャーを用いると何とか相手に自分の思いが伝えられることに気付くことができた。



【ブロックの数を尋ね合う】

このように、子どもたちが興味をもてる場を設定したり、特別支援教育の考えを生かして扱いやすい教具を使って活動させたりすることにより、お互いに尋ねたり、答えたりする必然性が生まれ、無理なく自然に新しい語彙や表現に出合わせるができるのである。また、このような活動を通して、「もっと大きな数の言い方を知りたい。」と新しい語彙を欲する気持ちを高めておくことで、中・高学年の外国語活動に生かされると考える。

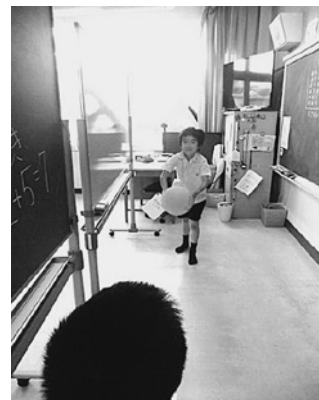
イ 第2学年「これは何?」(「Hi, friends! 1」Lesson 7) 実践より

本実践では、量を表すことば(“big”, “small”等)に出合わせる活動を行った。

いろいろな物の名前に慣れ親しんだ後、2枚の黒板の間に隙間を空け、白いドッジボールを投げた。子どもたちはすぐに、“It's a ball.”と答えた。次に大きな白いボールを投げた。すると子どもたちから「あれ、またボールだ。」「でも、さっきとは何か違う。」という声が聞こえてきた。続けてソフトボールを投げた。「あ、今度のボールは小さい。」「大きさが違うボールを投げたんだ。」「今度は大きさを当てればいいんだ。」という声が聞こえてきた。そこで、大・中・小の三つの大きさのボールを並べて、「大、中、小それぞれ英語でどう言えばいいのかな。」

と問いかけた。子どもたちは“big”と“small”とすぐに答えられた。しかし、中くらいの大きさを何というのか分からない。自然と「中くらい」を英語で何というのかをJTEに聞いてみたいという子どもたちの声が挙がった（自然に新しい語彙や表現に出合わせる場の設定）。JTEから「中くらいは“middle”と言うんだよ。」と教えてもらった子どもたちの中には、「ミドルって言葉聞いたことがある。」と反応する声もあり、子どもたちの生活の中にも“big”, “small”, “middle”という言葉が日本語と同様によく使われていることに気付いていった。

その後、ボールを投げる係、ボールを受ける係、大きさを答える係に分かれて「スローイングゲーム」を楽しんだ。見ている子どもたちは、JTEとともに、友達が答えた大きさが合っているかどうかを判断し、“Yes./No.”と英語で声をかけた。一巡した段階で、黒板の隙間の間隔をこれまでと比べて短くした。黒板と黒板の間隔を長くしたり短くしたりしながら“long”, “short”と繰り返し発音し、その意味と英語での発音の仕方を確認していった。「間が短いからよく大きさを見ておかななくてはならない。難しそう。」と言いながらも楽しそうに、“What's this?”, “It's a small ball.”, “Yes.”と英語でやりとりを行う子どもたちの姿が見られた。



【スローイングゲーム】

このように、いくつかのことばを教えた後の活動の中で、「言いたい」「知りたい」と新しい語彙や表現を欲する活動を仕組むことで、後の学年での外国語活動に意欲的に取り組むことができるようになる。

② 語彙や表現に慣れ親しませるために — 中学年の実践から —

中学年では、「Hi, friends!」の【Let's Listen】, 【Let's Play】, 【Let's Chant】, 【Let's Sing】を基に、語彙や表現を繰り返し聞いたり言ったりして慣れ親しんだ後、簡単なコミュニケーション活動（主体的なコミュニケーション活動のための練習）を行った。

ア 第3学年「天気予報士になってレポートをしよう！」

（「Hi, friends! 2」Lesson 5）実践より

本実践では、天気を表す語彙や表現に慣れ親しみ、それらの語彙や表現を使って「お天気レポート」を行った。

まず、HRTとALTがデモンストレーションを行った後、学級全体でアナウンサー役（教師）とレポーター役（子ども）に分かれてレポートの仕方を練習し、表現方法の確認をした。そして、国名や天気とその場所の様子を表すことばを確認した後、「お天気レポート」を行った。

「お天気レポート」は、日本にいるアナウンサー役と現地にいるお天気レポーター役に分かれて行う。自己決定や自己選択によって「友達のことを知りたい」「自分のことを伝えたい」と思えるような場を設けるために、アナウンサー役の表現方法は決めておき、お天気レポーター役の表現方法の中でレポートする国名と天気とその場所の様子は自分で決められるようにした。その際、自分で設定できる国名や天気やその場所の様子がなか



【ペアでお天気レポート】

なか決められない子どもには、国名・天気・その場所の様子を黒板に示しておいたことで、レポートに困るとそれを使うように友達どうしで声をかけ合いながら活動を進める姿が見られた（必然性のある場面設定）。

このように、決められた語彙や表現のみを使ってコミュニケーションを行うのではなく、選択の余地を残しておくことで、「自分の思いや考えを相手に伝えたい」「友達の考えを聞きたい」という気持ちを高めることができるのである。そして、このような経験が、積極的にコミュニケーションを行う態度の育成につながると考える。

イ 第4学年「友達を見つけよう」(「Hi, friends! 2」Lesson 1) 実践より

本実践では、自分の宝物として絵カードの中から一つ選び、絵合わせを通して自分と同じカードの友達を探そうと、“Do you have ~?”といった表現を使って積極的に尋ね合う活動を行った。

尋ねる必要感をもって“Do you have ~?”と積極的にコミュニケーションを図れるようにするために、10枚の絵カードをそれぞれ四つに切って40人に配り、「誰が自分と同じ絵カードを持っているのか知りたい」という思いを膨らませるようにした。カードの絵は「Hi, friends! 1」Lesson 4や、子どもたちが個々に決めたものから取り上げるようにした。子どもたちが個々に決めたものの中には、知らない単語が含まれているため、自然と「どう伝えればよいのか」と考えたり、「相手は何を伝えようとしているのか」と真剣に聞いたりする状況が生まれた(必然性のある場面設定)。ただその際、絵カードにある単語の言い方が分からないことで、コミュニケーションが停止することが予想された。そこで、そのような場合には、ジェスチャーを使ったり、絵カードを示したりしながらコミュニケーションを図れるように支援していった。

このように、自分の宝物(未習の英単語を含む)を友達に伝える場面を設定することで、第3学年の実践と同様に「自分の思いや考えを相手に伝えたい」「友達の考えを聞きたい」という気持ちを高めることができるのである。そして、このような経験が、積極的にコミュニケーションを行う態度の育成につながると考える。



【お互いの宝物を尋ね合う】

③ コミュニケーション活動の充実のために —高学年の実践から—

低・中学年で、「新しい語彙や表現に出会う」「語彙や表現に慣れ親しむ」活動を行った後、高学年では、コミュニケーション活動を行うことに重点を置き、「学習問題設定の場」「『気付き』の場」「アクティビティの場」それぞれに適切な支援を行うことで、コミュニケーションを図る力の育成を目指した。

ア 第5学年「わたしの好きなものは」(「Hi, friends! 1」Lesson 4) 実践より

本実践では、語尾に付く“s”の有無により、動物自体を表したり、その肉を表したりすることに気付き、場に応じて両者を使い分けながら自分の好きなものを紹介する活動を行った。

「学習問題設定」の場面では、下記のようなHRTとALTが演じる寸劇を見せ、2人が意思疎通できなかった原因を見つけさせた。

< At restaurant >	
ALT (waiter) : Hello. What do you like?	HRT (guest) : I like cow!
ALT : O.K. (after a short time) ALT : Please. (give a cow)	HRT : Oh, no! I can't eat it !!

その際、絵カードとジェスチャーを使って“cow”と“beef”の違いを説明するようにした。また、最初から語尾に付く“s”に着目させるのではなく、聞き分けやすい単語を扱うことで、動物自体を表す単語なのか、その動物の肉を表す単語なのか意識して聞き分ける必要性があることに気付かせることができた（**気付かせたい事柄の強調**）。

このように、余計な情報や操作を取り除いたり、気付かせたい事柄を強調したりすることで、「気付き」が生まれやすくなる環境を整えることができた。



【視覚と聴覚による強調】

次に、下記のような別の場面の寸劇やいくつかの例文を見せ、「動物が好き」「動物の肉が好き」の使い分け方に気付かせた。

< On the street >
 ALT: (Walking with his dog.)
 ALT: Thank you. Do you like dogs?
 ALT: You like dog!?! Oh, no. Don't eat my pretty dog!!

HRT: Hello! Oh, pretty dog.
 HRT: Yes, I like dog.

その際、絵カードとジェスチャーを使って見せるとともに、板書上に整理して示すことにより、語尾の違いに気付かせるようにした。またALTは、“s”をセンテンスの中で強調して発音することで、気付きを促すようにした（**気付かせたい事柄の強調**）。

このように、視覚と聴覚を用いて強調することで、動物が好きな場合は語尾に“s”が付くこと、動物の肉が好きな場合は“s”が付かないこと、そのどちらにも当てはまらないことばがあることに気付くことができた。

そして「アクティビティ」の場面では、状況に応じて自分の好きな物を紹介する活動を行った。ただ、短時間で“s”の扱いを理解することが難しい子どもがいることが想定されたため、「動物が好き」という見本を見せる場合は、その言い方を示した黒板の前に立ち、「その肉が好き」という場合も同様にその言い方を示した黒板の前に立つようにした（**視覚化・構造化された教材**）。



【話型と見本を近くする】

このように、着目すべき二つの情報（「話型」と「ALTとHRTの見本」）を近くすることで、子どもの理解を助けることができた。

イ 第6学年「お気に入りの国を紹介しよう」（「Hi, friends! 2」Lesson 5）実践より
 本実践では、お気に入りの国の文化の様子を捉え、その国の大使になって訪問してくれる日本人観光客に、訪れることによって楽しむことができるものを紹介する活動を行った。

チャンツによって、既習の語彙や表現を確認した後、JTEがオーストラリア大使になってワニを食べることを紹介した。その際、HRTがワニを食べるジェスチャーを見せることで、文化の違いに気付かせることができた（**気付かせたい事柄の強調**）。

また、このようなデモンストレーションを意図的に見せることで、日本人観光客の興味に合った文化等を選ぶことの大切さにも気付かせることができた。

次に、「アクティビティ」として、お気に入りの国を紹介する活動を行った。一人一人が自信をもって紹介ができることを保障する



【文化の違いに気付かせる】

ために、料理や名所、会話文をチャンツで練習するようにした。その際、活動で用いる会話表現をイラストや文字で表示し、さらにイラストとジェスチャーを連動させることで、紹介の流れをつかみ易くしたのである。そして、実際に紹介する場面では、紹介の手順や役割、ポイントを確認して、スムーズに紹介ができるようにした。また、紹介の手順を示した支援ボードと板書を連動させ、自分が紹介することばをボード上に貼ることでスムーズに紹介ができるようにした（視覚化・構造化された教材）。



【支援ボードと板書の連動】

このような支援により、日本と諸外国との文化の違いを理解した上で、その国の文化の中から、日本人であれば食べることができたり、楽しむことができたりするものを選び、絵やジェスチャー等、表現方法を工夫しながらお気に入りの国について伝え合うことができた。



【支援ボードを使って紹介】

3 成果と今後の方向性

昨年度、特別支援教育の取り組みを参考に見いだした「学習問題設定」「気付き」「アクティビティ」の場における支援により、外国語活動における「思考力」の育成に一定の成果を収めることができた。コミュニケーション能力の素地を養うためには、コミュニケーションの場が必要である。また、コミュニケーションするためには、ある程度の語彙や表現を知っておくことも必要である。本年度、新たに学年間の系統性を重視したことは、新しい語彙や表現に慣れ親しむ機会を増やすことにつながり、多くの子どもがコミュニケーション活動に積極的に参加することができる一つの支援となり得たのではないかと考える。

学年間の系統性を重視し、「思考力」の育成を図る取り組みは緒に就いたばかりである。今後も、本年度作成した年間計画を基に学年間の系統性を重視しつつ、すべての子どもの「思考力」育成を図り、楽しみながら積極的にコミュニケーション活動を行うことができるよう、特別支援教育の取り組みを参考に、よりよい支援の在り方を追究していきたい。

次頁以降に、本年度作成した各学年の年間指導計画を紹介する。